1988年8月15日

日本細菌学会
関東支部ニュース

第8号

略　歴

昭26年慶応大学医学部卒，インターン・国試終了後昭和27年母校微生物学教室助手（牛場大蔵教授），昭46年北里大学医学部教授（微生物学）現在に至る。専攻分野：感染症。道楽：骨董品（安物のみ）の蒐集。

第60回日本細菌学会関東支部総会に多数の方からのご出題をお待ちしております

総会長　秋　山　武　久

漸く近づいてきた第60回支部総会のお世話をさせて頂くことになりました。11月15（火），16（水）の両日，横浜市山下公園正門前にある県民ホールで開催いたします。粉骨砕身，準備に努力しておりますが，この努力を活かすも殺すも，偏に会員の皆様からのご出題数次第と考えております。各研究・教育施設1題ずつといわず，是非，複数のご出題をお願いいたします。一般演題は2会場で同時発表をして頂けるような手配を整えております。ご応募に際しては，日本細菌学雑誌43：(3)の募集要項をご参照下さい。

本総会には一般演題の他に特別講演，シンポジウム，教育講演各1題が組まれております。特別講演は15日午後にお願いし，これが終ると同時に懇親会にご出席頂くという手筈をしております。後2者は16日午後になろうかと考えます。

特別講演は，B型肝炎を立派に押さえ込まれた日赤中央血液センターの西岡久寿彌副所長に「エイズは押さえ込めるか」というお話をして頂くことにいたしました。エイズの重要性は今更，申し上げる迄もございません。単なる啓蒙講演でなく，先生ご自身の実験成積をも交えたお話がうかがえるものと期待しております。講演をお願いにうかがった折，「エイズは押さえ込めるか」の最後の“か”を付けるか削るかで議論いたしました。ご発表当日にでも，“か”を削ろうとおっしゃれば，急遽演題の一部修正をさせて頂きます。持ち

時間は,「聴衆を飽きさせないというお約束が頂ければ何時間でも」と申し上げたのに対して,「では,」ということで70分にお決め頂きました。

シンポジウムのテーマはひょんなことから決ってしまいました。昨年末も押しつまった29日の夕方，知人のお嬢さんが赤痢で某大病院に担ぎ込まれるという事件が起りました。当直医は血便を採取しましたが，中検が仕事納めをした後であったので，そのまま，冷蔵庫に入れておきました。正式に入院が許されてからは多数の医師が入れ替り立ち替り診察しましたが，診断はつきません。しかし，取敢えず，第３世代セフェムのラタモキセフを点滴静注してくれました。しかし，患者の症状は一向に良くならず，発熱と粘血を伴なった頻回の下痢がずっと続きました。結局，診断がついたのは，歳も改まっての７日，中検より純培養状に赤痢菌２ａを認めたという報告があってからでした。

私はこの話を聞いて憤慨いたしました。教科書に書いてあるような赤痢を，しかも，大勢の医師で診ていながら診断できないとは何たることか。ラタモキセフを静注しても，腸管内へは胆汁を介して微量が出るだけであるから効く筈がないではないか。第３世代を何で赤痢のような簡単な感染症に使うのか。そんな使いかたをするからＭＲＳＡ（メチシリン耐性ブドウ球菌）のような困った菌が出てくるのだ……。私は数人の友人に電話をして意見を求めました。その返事は只１つ，「感染症に関心の深い特殊な病院を除いては，みんなそんなもんですよ。ただ，そのような特殊な病院と普通の病院との間の，感染症に対する診断・治療能力のひらきは，昔に比べると格段に大きくなりましたがね。」でした。このようにして，「低下した日本の感染症学を斬る――その原因と対策」というシンポジウムが生れました。

まず，東海大・医・微生物の小沢敦教授と大口東綜合病院内科の藤森一平博士より基礎ならびに臨床医学者の立場から思い切って斬って頂き，続いて北里大・医・微生物の大沢伸孝助教授に基礎と臨床の接点にいらっしゃる立場からのご意見をうかがい，最後に，雄々しい未来の感染症学への道標となることが期待されている感染症の疫学と免疫遺伝学の現状を，それぞれ，自治医大・公衆衛生学の柳川洋教授と九大・生体防御医学研・遺伝学の笹月健彦教授からうかがうことにいたしました。なお，特別講演とシンポジウムの司会は私がやらせて頂きます。

教育講演は「川崎病のＡ群溶連菌感染症説」と題して，私が年来の研究の総纏めをさせて頂くことにいたしました。私には川崎病はＡ群溶連菌による感染症であるとしか考えられません。(1)患者の血中や鼻咽頭から本菌が分離されたという報告が皆無。(2)ASLO 値は陰性。(3)抗生剤が全く効かない。(4)患者の症状は猩紅熱と瓜２つであるものの，年齢分布は満１～２才の間にピークを持った１峰性で８才以上の患者はまず見られない。(5)何故か，抗ＥＢＶ抗体価も異常に低い，といった諸点をどのように説明していくか，お聞き頂ければ，これに過ぎる悦びはございません。なお，教育講演の司会役は川崎病を世界に魁けて報告された日赤中央病院・小児科の川崎富作先生にお引き受け頂きました。

第59回日本細菌学会関東支部総会を開催して

総会長　黒　坂　公　生

昭和63年６月４日（土），港区西新橋にある慈恵医大中央講堂で第59回支部総会を開きました。

他の関連学会とかち合わないよう日程を選んだつもりでしたが，結核病学会が札幌で３日まで開かれることがわかり，参加者が大分減るのではないかと心配しました。幸い選びましたテーマが臨床検査にたずさわっている人にも興味をひくものであったことから，学会員以外の検査技師の方が相当参加して下さり，250名を越える方の参加を得ることができました。

午前のシンポジウムは，「腸管病原菌：近年の展望」という主題のもとに，Campylobacter（伊藤　武），Yersinia（丸山　務），腸管出血性大腸菌（竹田美文），臨床の見地から（村田三紗子），下痢原性大腸菌の血清型について（田村和満），Aeromonas（沖津忠行）の６演題について上記６人の先生に講演をしていただき

ました。坂崎利一先生の解説をまじえた司会で，実のある討論ができたことを喜んでおります。

午後は近藤勇先生の司会で，光岡知足先生に「腸内常在菌の功罪」という題で特別講演をしていただきました。奇しくもこの4月，光岡先生は「腸内菌叢の系統的研究」で本年度の日本学士院賞受賞の栄誉に浴されました。この場をかりてお祝い申し上げるとともに，今回の特別講演をお願い致しました私にとりましても大きな喜びでした。

午後のシンポジウムは「油断のならない呼吸器病原菌」という主題で，吉岡守正先生の司会のもと，レジオネラ（藪内英子，山本啓之），肺炎マイコプラズマ（小林宏行），いわゆる非定型抗酸菌（戸井田一郎），オウム病クラミジア（徐慶一郎），老年者の肺炎起炎菌（島田馨）の5演題について上記5人の先生に講演をしていただきました。演者の先生方が臨床的な内容をまじえて話をして下さったので，常日頃病原体側に偏りがちな私にとっては臨床的知識を吸収するよい機会でした。また呼吸器病原菌の中から，今話題となっている弱毒菌を選んで下さった吉岡先生に厚く御礼申し上げます。

シンポジウム終了後，午後5時から大学2号館10階中ホールにて，ささやかですが懇親会を開きました。会場内で十分できなかった討論や質問をこの場で行っていただこうと思い，少し広い部屋を用意いたしましたが，非会員の方が多かったことや私達の案内が不十分であったこともあって，こちらの予想した程の方が御出席下さらず残念に思っております。

また私達の誤算から，朝受付が混乱し参加者の皆様に並んでお待ちいただくようになってしまったこと，抄録集の不足により十数名の希望者の方に抄録集をお渡しできなかったことを深くお詫び申し上げます。

最後に，本学会開催に当って色々御援助下さった木村支部長はじめ支部評議員の諸先生に心より御礼申し上げます。

集　会　案　内

第17回薬剤耐性菌研究会のお知らせ

大暑の候皆様にはますます御清栄のことと存じます。

さて，今年も例年のごとく，第17回薬剤耐性菌研究会を下記のとおり予定しております。皆様の御参加をお待ちしております。

特別講演は，万有製薬（株）研究開発本部長　田中信男（アミノ配糖体系抗生物質の殺菌作用），東京大学農学部農芸化学　助教授　松沢　洋（PBP2を中心として）の両先生にお願い致しました。

記

日　時：　8月25日（木）午後 ～ 27日（土）午前

場　所：　赤城緑風荘（群馬県勢多郡富士見村大字赤城山）

薬剤耐性菌研究会

世話人代表　橋　本　　一

事務局：〒317　前橋市昭和町3－39－22

群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設内

井　上　松　久（0272-31-7221　内2584）

議　事　録

・第10回評議員会

日時：昭和63年5月14日（土）14：30～16：30

場所：帝京大学病院本館2階第二会議室

出席者：秋山（第60回支部総会長），新井，川上，北野，木村（支部長），工藤，黒坂（第59回支部総会長），河野，島村，中村，久恒，平山，光岡，山口，池田（幹事）

欠席者：高橋，野沢，早津，三上

議題：

1. 第60回支部総会準備状況（秋山総会長）
開催日：昭和63年11月15日（火），16日（水）。場所：神奈川県立県民ホール。シンポジウム1題，特別講演1題，教育講演1題。一般演題申込締切：9月17日。予稿受付締切：10月8日。演題申込前（8月下旬）にPR紙（学会案内，横浜市内観光案内など）を配布する予定である。

2. 支部長会報告（木村支部長）
支部長会で支部会費の値上げについての議題が取り上げられた。関東支部を除く他支部の財政状況についてはおおむね良好であり関東支部のみ苦しいということが報告された。因に支部会費は東北，中部が年1,000円，他支部は年500円である。また支部総会開催補助は北海道5万，東北10万，関東40×2＝80万，中部30万，関西45万，中国・四国25万，九州20万であった。これらの報告を受けて高添本部理事（会計担当）から次のような発言があった。「関東支部では会員数が極めて多いので他支部とは別に考えねばならないと思う。このため本部でも来年の予算では支部に対する支出金を30万にするよう考慮中であり，これが実現すると関東支部には年約15万程増額になる計算である。しかし，この様に支部支出金を増額してゆくと際限がなくなるので，一応の歯止めが必要と思われる。この歯止めとして1つの考え方は，少なくとも支部会費が本部からの補助金（62年度約58万円）を下回らないことである。この点について支部としてよく検討されたい。」

3. 支部予算について
上記の報告に基づいて支部予算について次のような討議が行なわれた。1）支部ニュースに支部会費の値上げについて掲載し，会員にその実情を訴える。2）会務総会に諮る。3）次期支部長への申し送り事項とする。などの提案がなされた。

4. 各小委員会報告
学術集会小委員会（新井委員長）：支部総会会長選考基準の1）分野別の配分，2）本部または支部の評議員経験者を申し送り事項とした。
教育・将来計画小委員会（川上委員長）：1）アンケートの結果，2）支部の教育よりも将来計画を重視していく，3）現在の支部のありかたについて，現在話題になっている事項を申し送りとする。
支部ニュース小委員会（山口委員長）：1）編集方針については会員の方々の意見をうかがいながら，さらに検討していきたい。2）会員は支部ニュースを大いに活用して頂きたい。

5. そ の 他
関東支部評議員数は会員数にくらべて少なく，評議員選挙は他支部では行なわれていない現状を考慮して，支部会則の変更の点についても検討したらどうかという提案があった。

◇編集後記◇

△…暑中お見舞申し上げます。総会長をつとめられる秋山武久先生からの秋の支部総会についての1回目のご案内の時期に合せてつくった第8号をお届けいたします。

△…春の支部総会は黒坂公生総会長のご報告にありますように，盛会のなか無事終了いたしました。秋の総会にもふるってご出題ならびにご参加下さい。

△…この度の支部評議員選挙は投票率がかなり低いと木村支部長はご気嫌斜めの様子です。

△…今年は例のない長梅雨など異常気候続きですが，会員の皆様には呉々も健康に留意され，よい夏休みをお過し下さい。　(H/Y)

日本細菌学会
関東支部ニュース
第8号
(1988. 8. 15)
編集・発行：日本細菌学会関東支部
〒173 東京都板橋区加賀2-11-1
帝京大学医学部細菌学教室
☎ 03-964-1211